



4 現況、上流を望む

を渡り、宿を見上げて目にした梅を詠んだ歌と思われる。

名栗川橋の建設

一九一〇（明治四十三年）八月初旬の洪水で破壊した大喜橋は、復旧に際して地元民は木橋ではなく、堅固で流失しない永久橋の架設を強く望んだ。永久橋は莫大な工事費を必要とし、県の補助金を得て村が発注する工事費は総工事費の約六割であった。このため、地元有志は寄付金を募るほか、寄付金の提供困難者は無償の工事作業員として施工に参加した。工事は一九二四（大正十三年）四月、位置を大喜橋より上流に移して着工し、同年九月二十一日完成した（写真5は一〇月の竣工式）。このとき、橋名は名栗川橋となった。

与謝野晶子と名栗村

一九二九（昭和四年）年、歌人与謝野晶子がラジウム鉱泉を訪れ、「名栗の峡谷は、溪は細かいが女性的に優しく、（略）折々出偶ふ石欄の小橋や沿道の農家の茅屋根の趣きと共に、車上の人を倦ましめない」と述



6 名栗川橋位置図



5 大正13年開通式記念写真（楞嚴寺所蔵）

べている。晶子の眼は、新しい名栗川橋も印象に残したのだろうか。たしかに名栗の峡谷は、岩肌をみせる崖など男性的な風景がなく、山が豊かな森林で埋めつくされている。これらのスギ・ヒノキは西川材と呼ばれ、良質な建築材として江戸のまちづくりや大火の復興に寄与した。

名栗村の住民は、江戸との流通によって首都の情報に通じていた。河口から約八十一キロさかのぼった名栗溪谷に、近代的な永久橋を建設した背景には、村の有志がもっていた進取の気概と、後世の発展を望む夢があったからであろう。

著者（土木学会関東支部選奨土木遺産選考委員）

注：名栗村は二〇〇五年一月一日合併により、飯能市となった。
名栗川は一九六六年四月、一級河川入間川となった。

名栗川橋

― 後世への夢の懸け橋 ―



1 現況、上流右岸の構造局部



3 現況、大松閣(旧ラジウム鉱泉)



2 現況、右岸橋詰(丸石が土木遺産銘板)

名栗川橋のすがた

一九二四(大正十三)年に完成した名栗川橋は、荒川水系の支流人間川(旧名栗川)に架かる、一径間の鉄筋コンクリート上階アーチ橋である。橋の上・下流から望むと名栗峡谷が背景となり、その景観が素晴らしい。橋は埼玉県飯能市(旧名栗村)の下名栗地先(約八十一キロ)の渓谷の中にある。幅三・九メートル、長さ三三・三メートルで、現在も軽車両などの交通に供している(交通規制:車両幅二・二メートル、同重量二・〇トン)。

この橋梁形式は、県下で玉川橋(当時玉川村)に次ぎ二番目であるが、玉川橋より高欄が重厚で安定感を有している。また、拱台(アーチ部分)から立ち上がる支柱の接続部は、断面を増加させて固定を強化している。近年、床版など一部にコンクリートの剥離などが発生し補修がなされたが、大規模な損傷はない。

牧水と名栗川

一九二〇(大正九)年四月七日、旅と酒を愛する歌人若山牧水は、秩父から山を越えて名栗川の渓谷を下った。ここで数首詠まれたなかに次の歌がある。

仮橋のひたひた水にひたりたる

板の橋わたり梅のはな見つ

この日、下名栗地先の鉱泉宿に泊まる。この様子を次のように詠んでいる。

わかし湯のラジウムの湯はこちたくも

よごれてぬるし窓に梅味き

この谷間のひなびた鉱泉宿は、現在五階建ての大松閣であり、名栗川橋を右岸に渡って三百メートルほど奥にある(写真3)。

当時、この鉱泉への往来は木橋の大喜橋を渡った。牧水が訪れたときは、大喜橋が一九一〇(明治四十三年)の大洪水で被災して仮橋であった。はじめの歌は、牧水が街道から水辺において狭い急づくりの仮橋

小林寿朗 KOBAYASHI Toshion
共和コンクリート工業(株)
埼玉営業所

